

< 日中草の根交流にメディア文化が与える影響 >

研究期間 平成 29 年度

研究代表者名 吉光正絵

共同研究者名 周国強、河又貴洋、趙敬

1. はじめに

日中関係は、尖閣諸島の国有化以降、深刻な政治対立や経済の冷え込みが問題とされている。一方で、両国の市民間ではメディアや文化、アートを介した活発な交流が行われてきた。政治や経済レベルでの緊張が高まる現在において、メディアや文化、アートを介した市民レベルの交流は、きわめて貴重である。本研究では、中国（北京）でそのような日本と中国の市民間レベルの交流に尽力する女性を対象にインタビュー調査を行った。

そのうち、今年度の成果として、特に、新潟県で実施されている「大地の芸術祭」関連のアートプロジェクト「中国ハウス」の運営者を対象に実施した調査結果について報告する。

2. 調査概要

ここでは、「大地の芸術祭」に関連して中国アーティストらによって実施される「中国ハウス」プロジェクトのプロデューサーらがまとめた冊子の内容とインタビュー調査から、海外アーティストの地域とのかかわりや創作活動への地域からの影響について検証する。

インタビューは、「中国ハウス」を運営している瀚蔵文化（HUB ART PRODUCTION）の理事長の孫倩氏を対象に日本語で実施した。日時は 8 月 11 日午後 3 時から 5 時までで、場所は、孫倩氏の連携オフィスの一つでもある梁啓超書斎（北京市東四十四条東口内北溝沿胡同 52 号）である。故宮の東に位置する胡同にあり観光スポットとしても重要な場所に指定されている。梁啓超は、日本で長期の亡命生活を送ったこともある清末民初の政治家、ジャーナリスト、歴史学者である。インタビュー調査結果と調査時にいただいた孫倩氏編集の『華園通信七月節専集』及び『華園通信第二号』に収録されている記事もあわせて研究資料として利用した。

3. 「中国ハウス」の概要

瀚蔵文化（HUB ART PRODUCTION）は、「大地の芸術祭」の中国向けプロモーション、「中国ハウス」の運営、北京大、精華大、中央美術院の講演会のアレンジ等の業務を行う民間企業である。理事長の孫倩氏によれば、以下の経緯で「中国ハウス」は誕生した。

「中国ハウス」プロジェクトは、アート関係、企業関係、政府関係のネットワークで実施しており、現在までに 30 人くらいのアーティストや建築家を中国から招聘している。大掛かりなプロジェクトとしては、馬岩松氏の清津トンネルの現地視察と創作がある。馬

岩松氏は、ジョージ・ルーカス発案のナラティブ・アートミュージアムなど世界各地で巨大文化施設や高層タワーを設計してきた MAD アーキテクトの代表である。

4. 「中国ハウス」に対する日中交流への期待

「中国ハウス」の第一回プロジェクトとして、「大地の芸術祭の里」の夏祭り期間（夏季イベント集中期間である 2016 年 8 月 6 日から 2016 年 8 月 21 日）に「華園七月節」が実施された。「七月節」とは、収穫を祝う重要な農耕儀礼の立秋節の中国での呼び名である。日中両国の人びとが芸術を通じて交流し、一緒に収穫の喜びを分かち合うことを意図して命名された。ネットニュースによると、式には北川フラム総合ディレクター、中華人民共和国駐新潟領事館の何平総領事（当時）、十日町市の関口芳史市長のほか、室野地区の関係者ら約 100 人が出席した。何平総領事は挨拶の中で、「アートベースの設立の歴史において、この華園は中国の企業が日本で行う、初めての試みだ。両国の政治的関係にいざこざが続く中で、文化と芸術を通しての交流こそが、相互の理解を深め、感情を増進する良い場となる」とプロジェクトの意義を高く評価しているⁱ。また、室野区の佐藤達夫区長は、「中国のアーティストはここに駐在して、現地の住民たちと交流しながら作品を作っています。私たちは一対一の交流を非常に期待しています」と述べている。隣国関係の悪化が喧伝される昨今の風潮を超えてアートを介した草の根の交流が期待されていることがわかる。

5. 中国アーティストの創作活動と地域住民との交流

本研究では、新潟県の中山間地域で行われている「大地の芸術祭」関連プロジェクトの「中国ハウス」の運営者へのインタビュー結果から、そこで育まれている多様な文化交流の実際について明らかにした。その結果、「中国ハウス」プロジェクトを通して、日本と中国、都市と地方、子どもや若者と高齢者といった固有の文化や立場を乗り越えた交流が日常的に行われていることがわかった。そして、中国の都市部から来訪したアーティストたちは、地方の豊かな自然に囲まれた暮らしの中で地元の人々と普通のつきあいをすることで、新たな創造性を発見し成長していた。ボランティアとして参加していた若い主婦が娘の日常を写真に撮ることで、アーティストとしての自分を発見し、日中両国の人々の文化の乗り越えに大きな役割を果たすといった大きな成果もあった。そして、これらの成果は、地域の自然や暮らし方へのきめ細やかな配慮によって成し遂げられていたことがわかった。今回確認できた文化や慣習の乗り越えによる国家や言語、世代を越えたコミュニケーションや信頼の獲得は、中山間地域特有の地理的・自然的制約が生み出す条件不利性が大きな影響を与えている可能性も考えられる。これらの点については、その他の事例との比較などによって今後検証していきたいと考えている。

参考文献

勝村（松本）文子・田中鮎夢・吉川郷主・西前出・水野啓・小林慎太郎（2008 年）「住民によるアートプロジェクトの評価とその社会的要因-大地の芸術祭妻有トリエンナーレを事例として」『文化経済学』第 6 巻第 1 号。

北川フラム（2010 年）『大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ 2009』現代企画社。

北川フラム(2015 年)『ひらく美術-地域と人間のつながりを取り戻す』ちくま新書 1135

熊倉純子監修（2014 年）『アートプロジェクト（芸術と共創する社会）』水曜社。

中島正博（2012 年）「過疎高齢化地域における瀬戸内国際芸術祭と地域づくり-アートプロジェクトによる地域活性化と人びとの生活の質」広島県立大学。

野田邦弘(2011 年)「現代アートと地域再生-サイト・スペシフィックな芸術活動による地域の変容-」『文化経済学』第 8 巻 1 号。

橋下敏子（1997 年）『地域の力とアートエネルギー』学陽書房。

八田典子（2004 年）「『アートプロジェクト』が提起する芸術表現の今日的意義-近年の日本各地における事例に注目して-」『総合政策論叢』第 7 号、島根県立大学総合政策学会。

八田典子（2007 年）「芸術受容の『場』の変容-『大地の芸術祭』に見る『展覧会』の新しいかたち-」『総合政策論叢』第 7 号、島根県立大学総合政策学会。

松本文子・市田行信・水野啓・小林慎太郎（2005 年）「アートプロジェクトを用いた地域づくり活動を通じたソーシャルキャピタルの形成」『環境情報科学論文集』。

i CRI ONLINE「中国総合アート展、大地の芸術祭の里で開幕（新潟）」2016-08-12
(japanese.cri.cn/2021/2016/08/12/162s252344.htm) 2018 年 1 月 31 日最終確認。